

十人十色

それぞれのワーク・ライフ・バランス



株式会社 柳屋本店
村松 美里さん 22歳 未婚

7:2:1
＜仕事＞＜家庭＞＜自分＞

■ 久々の女性営業職

今年の3月に家族とともに静岡市から焼津市に引っ越してきた村松さん。大学卒業後、柳屋本店に入社し営業二課に配属され、会社でも久々となる女性営業職になりました。男性営業マンに混じり、唯一の女性ということに気負いや不安があるのではないかと思います。村松さんの笑顔からは、充実した毎日を送っている様子が見てとれました。

■ 心を込めた挨拶を

商品の勉強、電話対応、接客など多くのことを学んでいる村松さんに一番心がけていることをお聞きすると「人の第一印象は挨拶で決まると思いますから、特に心を込めるようにしています」と、爽やかに答えてくれました。接客中にお客様から「ありがとうございます！」の声を聞くとやりがいを感じるとも。また、自宅で商品の食べ比べをしているということで、お気に入り商品を伺うと「かつおの佃煮は、しっかりとっていておいしいですよ」と勧めてくれました。

■ 今は仕事が一番

人生について大切にしたいことをお聞きしました。「仕事」「家庭」「友達」の3点をあげ「仕事」はキャリアアップを目指しているとのこと。その言葉どおり『ワーク・ライフ・バランス』は、「仕事7」：「家庭2」：「自分1」と数字にも表れています。

休日は家事を手伝ったり、友人と出かけたりしているようですが、中学生から大学まで吹奏楽でクラリネットを演奏されていたので、吹奏楽にも興味をもっているとのこと。



■ 将来の夢

将来の人生設計をお聞きすると「将来は、結婚して子どもができて焼津で暮らし、共働きしながら家族のために安定した生活を送りたいですね」と素敵な笑顔を見せてくれました。

「家庭科」は時代に応じ、変わってきています。女子だけが学ぶものから男女ともに学ぶものへ、さらに男女共同参画社会基本法が制定されたことを受け、教科書ではジェンダーや男女平等についても記述されるようになりました。

今回、子どもの頃から学校教育で男女共同参画の理念に接してきた世代にお話を伺いました。皆さんは日常の何を大切にしたいですか？どのようなワーク・ライフ・バランスが理想ですか？

※ジェンダーとは…「社会的・文化的に形成された性別」を意味する言葉です。社会通念や慣習の中にある、社会によって作り上げられた「男性像」「女性像」のような男性、女性の別のことです。

※ワーク・ライフ・バランスとは…「仕事と仕事以外の生活との両立」を意味する言葉です。やりがいのある仕事と充実した生活を両立させながら、個人の能力を最大限に発揮できるように支援する考え方や施策のことです。



1968年 中学で、男子が「技術分野」を、女子が「家庭分野」をそれぞれ学ぶことになる。当時の中学生は現在62歳

1994年 高校家庭科の男女必修の実現。当時の高校生は現在39歳

1999年 「男女共同参画社会基本法」が制定され、「家庭科」にジェンダーと男女平等の視点が加わる。当時の高校生は現在34歳

※あざれあ交流会会議グループ ねっとわあく vol68 2017年3月 5ページより



株式会社 サンロフト
永井 浩由さん
29歳 既婚 子ども2人(2歳・0歳)

6:3:1
＜仕事＞＜家庭＞＜自分＞

■ 「やりがい」と「将来性」

卒業後、東京で5年ほど働いて静岡に戻りました。いったんは別の会社に就職したものの、社風になじめず現在の会社に。転職の際に重視したことは「やりがい」と「将来性」で、仕事の幅の広さや社長の理念にも共感したそうです。キャリアアップは希望するけれど、出世したいというよりは後輩や部下のために自分の思ったことを実現できるような地位につくのが目標とのこと。



■ うまくやっていく秘訣

仕事でも家庭でも自分を主張せず黒子に徹するという永井さん。職場でも上司や新入社員の話をまずは聞いてから、というスタンス。家でもおしゃべり好きな妻の聞き役にまわることが多く、基本的に仕事の話は家庭に持ち込みません。

■ 理想は5:5:0

現状は6:3:1ですが、理想は5:5:0。仕事と家事・育児、どちらも好きなことなので、趣味のように思えるそうです。血洗いが得意で、今のところアイロンかけ、掃除機かけ、風呂掃除、ゴミ出しを担当しています。周りを見ても家事をしないのは少数派とのこと。自営業で母も働いていたのに、父は全くやらないので「それはおかしいんじゃないか？」と感じていたそうです。

■ 子どもと何でも話せる友達に

元ホテル勤務の妻は現在専業主婦ですが、上の子どもが3歳になるのを機に外に預けて働き始める予定です。ただ、家庭を重視するため当面はパート勤務を希望しています。いつかは二人でカフェを経営してみたいという夢もあるそうです。「子どもに慕われ、何でも話ができる友達のような親になり、老後は孫の面倒を見て過ごしたい。」と将来を語ってくれました。



社会福祉法人
焼津福祉会 虹の家
服部 桃さん
26歳 未婚

3:4:3
＜仕事＞＜家庭＞＜自分＞

■ 東京での大学生活

小学校4年生から始めた馬術競技は、地域や学校からの声援を背に、国体や海外遠征も経験しましたが、大学2年生で競技生活を引退。馬一色だった生活が一変し、今まで見てこなかった広い世界を知り、自分と向き合う時間が持てたそうです。また、4年間の一人暮らしで、地元・焼津の良さや、家族のありがたさにもあらためて気付くことができたといいます。



■ 福祉の道へ

卒業後は静岡に戻って他大学へ三年次編入し、保育士・幼稚園教諭の資格を取得。障害者施設での実習では、彼らと衣食住を共にし、何かを「してあげる」のではなく「してもらおう」ことが多く、貴重な体験となったとのこと。地域の人と助け合って生活していきたいという気持ちが高まり、就職先には子どもから高齢者までたくさんの地元の方と出会える焼津福祉会を選びました。

■ 自らが成長することで

施設利用者それぞれの気持ちに寄り添うには、広い視野を持つことが必要となります。現在はマリネレディや地域の消防団にも所属し、日々経験を積み勉強中。自分のためにしていることが、もし何かの時、人の役に立つことがあればそんな嬉しいことはないと考えているとのこと。

■ どれも前向きに楽しく

仕事は大変なこともあるようですが、利用者の笑顔が何よりの力となっているそうです。さりげなく見守ってくれている家族があってこそ今の自分、自分もそんな家庭を築き、仕事も前向きに取り組みたいという服部さん。「仕事・家庭・自分は切り離せないですね。運動していると思うので、どれも前向きに楽しくいきたいですね。」と語ってくれました。



焼津市役所
岡崎 雄太さん
30歳 既婚
子ども1人(2歳)

6:3:1
＜仕事＞＜家庭＞＜自分＞

■ 転職したきっかけは

今年の4月から市役所に勤務している岡崎さん。以前は、県内の銀行で8年間勤務していました。通勤に片道1時間かかっていたそうです。一昨年の11月にお子さんが生まれたことで、子どもの学校行事に行けるようになりたいという気持ちや、生まれ育った焼津市で社会貢献をしたいという気持ちが強くなっていき、転職を決意。昨年、焼津市の職員採用試験を受けました。中学生の頃、ボランティアで地域活動をしていたことも、今回焼津市役所で働くことを決めるきっかけとなっているそうです。

■ お互いができることをやる

正社員で働く奥様と家事は分担しています。以前より家庭での時間も増え、食器洗いや洗濯物干ししますが、どの洗剤を入れたらいいかわからないから洗濯機は回せない・・・とのこと。お互いが得意なことをやっていくうちに、自然と役割分担ができていたそうです。今の一番の楽しみは、子どもと遊ぶ時間。列車のおもちゃに熱中しているそうです。

■ 家庭を持って変わった内向的な性格

ももとは内向的な性格だったそう。「以前の自分なら、今回のインタビューの話も断っていた」と岡崎さん。奥様が内緒で応募したクイズ番組の出演を機に気持ちがふっきれたといいます。元々好きで見ていたクイズ番組ですが、見るものであってまさか自分が出演することになるとは思ってもみなかったとのこと。抽選で選ばれ、審査に通過し、意を決して番組に出演したことが大きな変化となったそうです。

■ 将来の夢

将来の夢は、出演したクイズ番組の親子大会に出ること。置かれた環境に応じて柔軟に選択をしていく岡崎さん。新しいことにチャレンジすることで何かが変わるかもしれない。そんな気持ちを抱かせてくれました。



今号からAしおかぜの編集委員が変わりました。次の3名で編集します。よろしくお願いします。

- 初心に立ち返り、「誰もが自分らしく生きられる社会」を考えるきっかけとなるような紙面を目指していきたいと思います。⑤
- 『ワーク・ライフ・バランス』の大切さと均等に保つことの難しさを実感。今回初めてイラストを制作させていただきました。⑥
- 若い世代への取材から前向きに仕事を頑張るつつ日常生活も大事にする姿勢がうかがえました。バランスのいい生活。理想です。私は・・・というまだまだ偏りがあります。⑧

